

「地域アイデンティティ～人と空間との関わり合い～」



羽鳥 剛史
愛媛大学大学院
理工学研究科 准教授

【はじめに】

本日は、道について触れつつ、「人と空間との関わり合い」について考えたいと思います。最初に、自分自身が道路空間、あるいは都市空間とかかわりを持った経験を2つほど紹介させてもらって、そこから問題意識を説明したいと思います。



【松山市の放置駐輪問題】

3年前に愛媛大に赴任して、松山市に参りました。まず放置駐輪が非常に多いなという印象がありました（スライド①）。昔のほうが、もっとひどかったらしいですけど、いまだに市内は相当数の自転車が放置されております。最初に愛媛大でやった仕事が、この自転車の放置をなるべくなくす仕事でしたが、いまだにあまりなくなっていないのです。今日の話につなげると、自転車が放置されて歩行の障害になるとか、緊急車両が入れないとか、そういう問題も大事ですが、僕自身は、ここに住んでいる人の美意識、町並みというものにもう少し目を向けるべきなのではないかという問題意識がずっとあります。

1

松山市 放置駐輪問題



それについて考えさせてくれる本として、拓殖大教授の井尻先生の『自画像としての都市』という本があります。都市はそこに住む人々の自画像であり、そこに住んでいる人の公共心ですとか、美意識というものがおのずと都市の形にあらわれてくると述べられています。そうした視点に立って、放置駐輪の問題にまず関わりました。

【宇和島市の段畑】

愛媛県の南のほうにある宇和島市・三浦半島の先端に遊子水荷浦があり、現地では段畑と言われている段々畑があります（スライド²）。去年から学生と一緒に、ここでジャガイモづくりをしています。ここは重要文化的景観に指定されているところで、江戸時代から開墾が進んで、いわゆる半農半漁の暮らしをこの人たちは営んでいました。戦後、昭和30年ごろからジャガイモの栽培が本格化して、全国的にも注目を集めていますが、昭和40年代に入り、ジャガイモ価格が暴落する一方で、養殖業が盛んになり、経済的に豊かになったため、段畑の放棄、あるいは荒廃が進みました。平成に入って、古くから残っている景観としてもう一度着目を浴び始めて、1999年、全国で3例目となる重要文化的景観に指定されるという歴史を持っている場所です。

地元の人々は、この段畑に対してポジティブな認識を持っていないというアンケート結果があります。（スライド³）は、遊子の住民と宇和島の都会に住んでいる市民に段畑を保存すべきかどうかというアンケートをしています。都会の市民は保存したいとほとんど思っているのですが、遊子の住民の多くは、都会に比べると保存したくないと回答しています。ここで「いいえ」と答えている人の多くが漁師さんで、あまり段畑に依存していない、若い世代です。若い漁師さんの世代は、段畑をあまりポジティブに捉えていないようです。

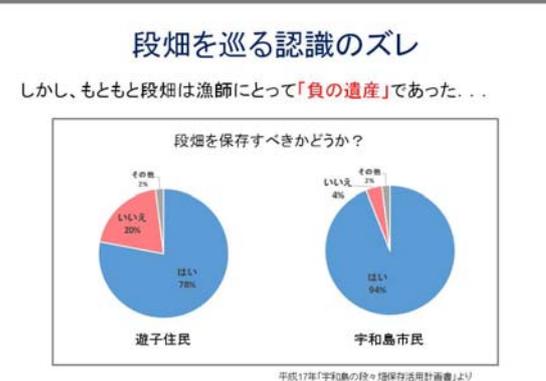
もっと顕著にあらわれてくるのは、（スライド⁴）の段畑の保存活動に自分も関わっていききたいかという質問への回答です。半数以上の人たちがかわりたくないと思っており、特に若い漁師さんにとっては負の遺産として段畑が受けとめられているようです。

この地域で、自分自身も畑作業をしながら地元の方といろいろしゃべってみると、道路ではないですが、段畑という一つの空間をめぐるアイデンティティのぶつかり合いのようなものが見られると

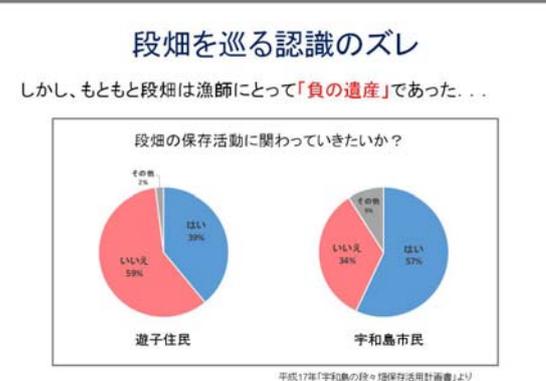
2



3



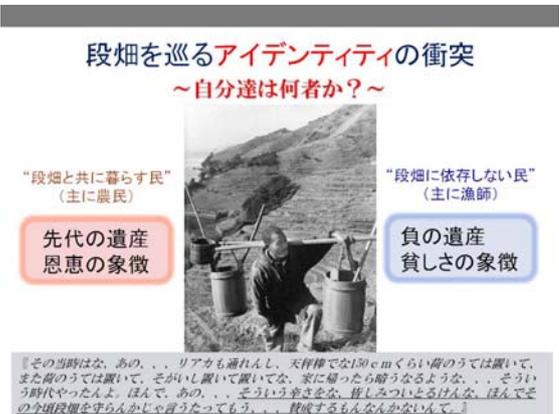
4



というのが徐々にわかってきました。どういうことかと申しますと、表向きは、段畑を維持するのかどうか、あるいは保存するのかどうかという問題ですけれど、その背景には、要するに自分たちは、段畑とともに暮らしていく民として自分を捉えるべきなのか、あるいは段畑という古い遺産は捨てて段畑に依存しない民としてこれから生きていくのか、こういう決断を迫られているような問題として捉えられる。

(スライド5に示すように) 前者は主に農民、ここで農作業をやっている方々ですけれど、その方にとって段畑という空間は、まさに先代の遺産であり、かつ恩恵の象徴である。一方で漁師さん、若い世代にとっては、ちょっと古くさい、かつ非常に貧しかったエリアなので、貧しさの象徴のようなものとして、この空間を捉えているというような側面があります。住民一人一人においても、必ずしも2つに二分されるわけじゃなくて、恩義を感じている側面もあれば、ちょっとコンプレックスというか、過去に対する負い目のようなものも感じている。そういった中で、この空間をどうしていくのかという問題が起こっているという問題の構造が見て取れたりします。

5



【現代の問題】

以上、2つ、放置駐輪問題と段畑の空間の維持という全然違う問題を取り上げました。本日取り上げた問題としては、人と空間というものが非常に密接なつながりがあるということが言えそうなんです、特にこれから考えていかないといけない現代の問題としては、その2つ、人と空間というものがかなり分離されつつある。

あるいは、そういうアイデンティティというものが希薄化しているような側面もあるのではないかと。これが、これからの空間整備ということを考える上では忘れてはいけないことと考えています。

6



(スライド6)

ちょっと極端な写真を2つ並べていますが、何となく左の写真を見ると、直感的に非常に空間になじんでいる、あるいは根づいている、人々が埋め込まれているような印象を受ける一方で、こうやって携帯をいじって歩いている人というのは、どちらかという空間になじんでいなかったり、根づいていなかったり、あるいは阻害されているような、そういう印象があるのではないかと直感的に思います。こういう観点でいくと、どんな都市空間、ある

いは地域空間を整えたとしても、そこに住んでいる人、その空間を利用する人が、その空間になじんでいなかったり、あるいは愛着を抱いていなかったりすると、全部がこういう側面で評価できるものではないですが、一面としては良質な空間とは言いがたい、そういう側面もあるのではないかと感じております。

【地域アイデンティティという概念】

地域アイデンティティという概念が主に社会心理学とか社会学、あるいは文化人類学の分野の研究にあります。英語で言うとPlace Identityというところで、Placeというのが土地とか、場所とか、空間です。Identityというのはまさに自己同一性、自己とは一体何なのかということです（スライド

7）。この2つを合わせてPlace Identityとって、定義は研究者によって全然違って、物理的世界における自己の社会化、physical world socialization of the selfとか、場所に関する自己のカテゴリー化、self-categorization in terms of placeというような定義もされています。いずれにせよ、人というのが、自分がかかわっている場所、自分が住んでいる場所を自分のことのように感じる、あるいは自分とは一体何かということを考える場合に、Place、場所というものが重要な要素になっていくという、こういう2つの関係をあらわしてPlace Identityというような概念が提示されております。

7

地域アイデンティティ

Place Identity

土地・場所・空間

自己とは何か

- ・「物理的世界における自己の社会化」
("physical world socialization of the self", Proshansky, etc. 1983)
- ・「場所に関する自己のカテゴリー化」
("self-categorization in terms of place", Lewicka, 2008)

実際のPlace Identityの特徴として、Identity Process Theoryというのがありますが、4つの特徴を整理します（スライド8）。

まず場所に関する弁別化です。場所を介在して、自分とそこに住んでいない人との差別化を図る。簡単に言えば、私は関西人ではなくて関東人だというような、自分が住んでいる場所によって自分というものを確立する。

2点目はcontinuity、連続性ということで、過去から住んでいた場所があるとすると、そこでの記憶を通じて自分のアイデンティティというものを確立していく。自分の住んでいるまちは子供時代のことを思い出させてくれるという特徴もある。

3点目が場所にかかわる自己尊厳ということで、シビックプライドも関係するかと思いますが、自分の住むまちに誇りを抱いている。

4点目は自己効力性ということで、利便性、日常生活に必要なものは、このまちで手に入るというような感覚。こういう特徴によってPlace Identityというものが特徴づけられると思います。

「忘れかけた隣りの歌」、徳永民平という愛媛出身の歌人の歌です。「街の隣りに街があり 人の隣りに人がいる 八百屋の隣りに風呂屋があり 居酒屋の隣りに髪結がある」。これは一部で、この後に、こういう町並みがもう消えてしまったというような詩が続いていく。これも文字だけ置くと、単に空間のお店の配置を言っているだけなので、それがどうしたということですけども、やっぱり人はこういうのを見ると、何となく郷愁を感じるというか、自分の記憶と重ね合わせていく、あるいはアイデンティティを形成していくとか、アイデンティティの重要な要素にこういう側面があるということを感じ取られるところもある。

こういうことを考えますと、やっぱりPlace Identityというものがどうやらあって、言い方をかえると、自己とは何かということを考えるときに、人間は割と空間的に自分とは何かということを考えている側面があるのではないか、こういう解釈もできると思います。

アイデンティティ過程理論 (Breakwell, 1986)

- ・場所に関わる**弁別化 (distinctiveness)**
 - ・「私は関西人ではなく、関東人だ」
- ・場所に関わる**連続性 (continuity)**
 - ・「私の住む町は私に子供時代の事を思い出させてくれる」
- ・場所に関わる**自己尊厳 (self-esteem)**
 - ・「私は自分の住む町に誇りを抱いている」
- ・場所に関わる**自己効力性 (self-efficacy)**
 - ・「日常生活に必要なものはこの町で手に入る」

また、社会心理学等の研究の知見に基づくと、この地域アイデンティティというものも地域と自分とのかかわり合いによって4つぐらいタイプがあるとされています（スライド9）。

1点目は、拡張自己、self-extensionとかextended selfという言い方もしますが、図式的にあらわすと、自分と場所がこういう関係になっていて、これは特に自分が所有しているもの、場所にかかわるものではないですけど、愛車とか自転車とか、もっと言うと自分の愛用しているペンとか、自分の所有物を人間は自分のことのように感じるような、そういう存在であるというふうに言われている。要するにself、自我というものが自分の所有物にextendする、拡張していくという意味合いで、拡張自己というような概念が言われていたりしています。

これは、結構昔から言われていて、古くはウィリアム・ジェームズという心理学者が、「人の客我、meというのは、考え得る最広義においては、人が我がものと呼び得る全てのものの総和である」と言っている。自分のものだと言っているようなものも全部含めてme、自分、自己というものであるという、ちょっと哲学的な言い方ですが、こういう言い方をされています。あるいはジンメルも、自分が所有している愛車とかペンとか、そういったものがほかの人から傷つけられると、経済的な損失以上に自分が傷つけられたような感覚を感じるというような言い方をされていて、背景には拡張自己という考え方があるかと思います。

逆の発想もあって、自分というものがPlace、環境とか場というものに埋め込まれているという感覚も地域アイデンティティの中にはあるということで、これは帰属意識という言い方や、あるいは環境の一部としての自己ということで、自分のアイデンティティの根拠というものが、自分のかかわったような場所とか環境、空間に位置づけられる、根拠づけられるというような感覚であるというのものもある（スライド10）。

9

地域アイデンティティの4類型 (Droseltis, etc., 2010)

① 拡張自己 (self-extension)



「物的所有」と「自己」感覚との結びつき

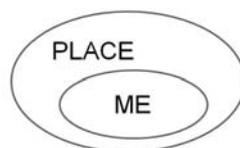
「人の客我（me）とは、考え得る最広義においては、人が我がものと呼び得るすべてのものの総和である（James, 1892）」

「物的所有物とは、いわば自我の拡張であり、このため我々の所有物へのいかなる侵害も、その人物への冒瀆と感じられる（Simmel, 1950）」

10

地域アイデンティティの4類型 (Droseltis, etc., 2010)

② 環境への適合 (environmental fit)



物理的環境に適合する「自己」

- 「帰属意識」「環境の一部」としての自己感覚
- 環境が自己の存在の根拠となる

3つ目は、場所と自己というものの同質性 (congruity) です。同質性が非常に低いというのは自分と場所がちょっと異質なものとして受けとめられている場合で、同質が高いというのは自分と場所が同じようなものとして受けとめられている場合です。これは、よく大阪の人とか、東京の人とか、下町の人とか、山の手の人というような言い方をする場合、こういう考え方に近いかと思えます (スライド11)。

あと、感情的な愛着 (attachment) という関係もあります。これは図であらわすと、愛着が低いというのは心の距離が離れている、愛着が高いというのは非常に密接なかかわりがあるということで、言葉にあらわすと自分のまちが好きとか、愛着があるというような感覚に近いと思えます (スライド12)。

また、人と場所とのつながりのタイプ、これは文化人類学の整理の仕方ですけど、6つの関係のタイプがあるとされています (スライド13)。1つ目はgenealogical linksといって、これは、系譜的なつながり、親族関係とか家族関係を媒介とした地域との、あるいは場所とのつながりのことです。実家とか、本籍とか、そういったつながりのことになるかと思えます。

2点目は、異質ですけど、コミュニティの喪失ということで、自分の住んでいた場所から離れて行ったり、自分の住んでいたまちがなくなってしまうたり、なくなったことによる関係ということで、これは郷愁とかノスタルジアとか、そういった感覚になるかと思えます。

経済的なつながりは、職場、あるいは土地の所有関係などです。そういった関係も人と場所との関係としてある。

宇宙論的なつながりは宗教的、あるいは精神的なつながりということで、マチュピチュとか、四国で言うとお遍路とか、そういう関係になるかと思えます。

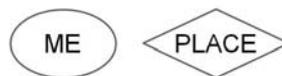
5つ目は、これも宗教とか精神というものと関係していますが、文化儀礼的なつながり。Pilgrimage

11

地域アイデンティティの4類型 (Droseltis, etc., 2010)

③ 場所-自己の同質性 (place-self congruity)

i) low congruity



ii) high congruity



「大阪の人」
「東京の人」
「名古屋の人」、...

12

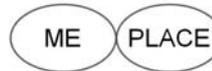
地域アイデンティティの4類型 (Droseltis, etc., 2010)

④ 感情的愛着 (emotional attachment)

i) low attachment



ii) high attachment



「自分の町が好き」
「自分の町に愛着がある」

13

人と場所とのつながりの形態 (Low, 1992)

- ・系譜的つながり (genealogical links)
 - ・ 家族・親戚関係を媒介した地域とのつながり、実家
- ・コミュニティの喪失 (loss of community)
 - ・ 失われたコミュニティへの愛着、郷愁、ノスタルジア
- ・経済的つながり (economic linkage)
 - ・ 職場とのつながり、土地の所有関係
- ・宇宙論的つながり (cosmological links)
 - ・ 宗教的・精神的つながり、マチュピチュ、お遍路
- ・文化儀礼的つながり (pilgrimage and celebratory cultural events)
 - ・ メッカ、伊勢、国立競技場、コンサートホール
- ・物語的つながり (narrative linkage)
 - ・ 物語や土地の名称を媒介したつながり

は巡礼という意味ですけれど、メッカですとか、日本でいくとお伊勢参りとか、あるいは国立競技場とか、シンボリックな儀式や巡礼にかかわるような場所とのつながり。

最後、ここは次の話とかかわってきますが、物語的なつながりです。物語とか、物語を含んだ土地の名称、そういったものを媒介したつながり。こういう6つぐらいのタイプに分かれると言われています。

いろんな整理がされていたり、研究もされていたりするけれど、結構興味深いと思う一方で、これまで十分研究されていない観点としては、処方的なアプローチがあまりない（スライド14）。ということかということ、どうやって地域アイデンティティ、あるいは地域愛着というものが醸成されるのかという観点から研究する例というのがあまりないです。全くないかどうかはわかりませんが、こういう観点から捉えている事例が少ないと言えるかと思います。

14

従来研究の盲点

- ・処方的アプローチがあまりない
- ・いかにして地域アイデンティティや地域愛着が醸成されるのか？

【回想法を用いた「思い出」実験】

1つのヒントとして、これは、Place Identityで言うPlaceの部分はないですけども、人のアイデンティティを確立する一つの手法として、精神医療の分野で回想法というのがよく使われています。

（スライド15）特に高齢者の方を対象に、過去の思い出を思い起こしてもらい、記憶を呼び起こしてもらい。そうすることによって自分の人生に対する再評価をしたり、それを通じて自分のアイデンティティ、自己というものを強化したりする。そうやって心理的な安定性とか、認知症の方の記憶力の改善を図る、心理療法として回想法がよく使われています。

15

“回想法”

- ・過去の思い出に対して共感的な態度で働きかけることを通じて、人生に対する再評価や自己の強化を促し、心理的な安定や記憶力の改善を図る療法。



※ 葛飾区HPより



※ 北名古屋市HPより

Place Identityでも多分同じような構造はあるだろうということで、以前、松山市民を対象に非常にプリミティブな実験ですけれども、思い出実験ということをやったことがありますので、簡単に紹介します。(スライド16)

これは、自分の住んでいる地域とかかわった思い出を思い出してください、それを自由に書いてくださいという非常に簡単な実験です。その実験

をするとともに、その人と地域とのかかわり合いや、地域愛着なんかも一緒に聞いています。こういうことを聞きますと、非常に熱心に自分の地域とのかかわり合いについて一生懸命書いていただけました。

こういう思い出を思い出してもらった人と思い出さなかった人で地域愛着がどのぐらい違いがあるのかということを見ると、やっぱり過去のかかわり合いの思い出を思い出ただけで地域への愛着意識が高まる(スライド17)。これも常識的には当たり前かと思いますが、こういう傾向がはっきり見られるということは、地域アイデンティティなり、地域愛着なり、「人と空間との関わり合い」ということを考える上で、その土地とかかわった記憶というものが非常に重要な役割を果たしているのではないかということが言えると思います。

また、どういった内容の思い出を書いているかということ調べますと、圧倒的に松山城の思い出を思い出す方が多かったです。まちのシンボルとして松山城がある(スライド18)のは、改めて言うまでもないことですが、松山市民にとって松山城、あるいは城山というのがシンボリックな地物になっています。自分も3年間松山に住むと、いろんなところから城が見えますので、松山市民だという感覚は日々、日常的に感じられるところがあります。

松山城は即物的に考えると単なる物理的な建物ですけれど、そこに住んでいらっしゃる方にとっては、物理的な建物以上の意味を帯びていて、自分の記憶を介して、この場所と密接なかかわり合いを持っていて、松山市民というアイデンティティにかなり不可欠な要素になっていると考えられます。

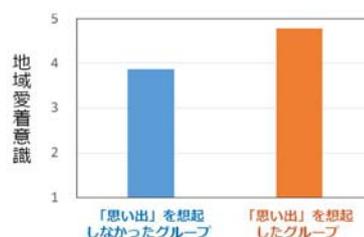
16

松山市民「思い出」実験

- ・松山市内の住民(111名)を対象
- ・実験対象者の半数に対して、地域に関わる“思い出”を想起してもらい、その内容を自由に記述してもらった。
- ・その後、対象者の「地域愛着」を測定した。

17

「思い出」の想起効果



地域に関する「思い出」を想起することによって、地域愛着が向上する!

18

松山市民の“思い出”の内容

「松山城」に関わる“思い出”を想起する人が多かった。

- 1位: 松山城/城山(21名)
- 2位: 学校(15名)
- 3位: お寺・神社(12名)
- 4位: 公園(10名)

▶ まちの「シンボル」としての松山城

無理やり道というものにもっていくと、直接道路の話をする人も何人かいたのですが、そうじゃなくても、自分の印象に残っている古い思い出を語るときには、大抵は道路の上での経験が語られています（スライド19）。明示的に道路という方は少ないですけど、その上で走ったとか、お父さんと自転車に乗ったとか、散策をしたとか、お祭りのとき練り歩いたとか、散歩をしたとか、そういうことを書かれる方は多いです。明示的でないにしろ、暗示的にしろ、その地域に住んでいる人々の記憶にやっぱり道というのは結構大きな影響を及ぼしているだろうということは改めて感じた次第です。

19

記憶に残る“道”の上での出来事

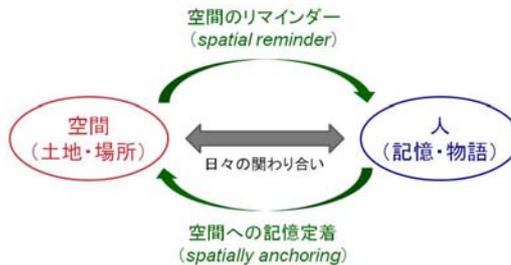
- ・ 中学校の時の城山マラソン。寒い中、上まで登り下りの時いきおいがつかって止まらなかったのを覚えています。
- ・ 戦後のことですが当時の町名は府中町と言いますが土の道路で荷太厚との草が生えていました。子供達の小さい頃、（20年前くらい）子供おこして町内を歩いたことです。その頃は、子供たちも多くてにぎやかでした。今は、少子化と、老人が多くてなみしいお祭りです。
- ・ 水曜町通り沿いに100m程わたり、金魚すくいなどおの出店が並び、2日間、夕方から行われる。
- ・ 父親と一緒に自転車で走った思い出。
- ・ お城下ウォークに家族で参加し、家の近所を歩いて散策したこと。
- ・ 近くに住んでいた時は、夏まつりや秋まつりです。おみこしや子供達と一緒に町を歩かせ、子供会の役員でもあり、とても忙しかつたけれど楽しい思い出です。
- ・ 小学生の頃、平物道にやぐらを組み、その間に輪をつくりおみこしを50〜70人ほどでしました。木霊や、おいでや小唄、嵐鼓などのお曲がかかり、みんなでお祭りをしました。
- ・ 父母と手をつないだり、おふれられたりして歩いた家（まわり）の道、アスファルトではない土と小石の道で水たまりのできる道と小さな川（というか鵜渡か）。
- ・ 昔は通学路に田んぼや畑があり、虫や作物が育っていく姿を見て遊んでいました。
- ・ 家の横の道路（越えておまき車の通らない道）が近所の子もたちの遊び場になっていて、そこで遊んでいたことが一番古い思い出でしょうか。
- ・ 子供のころに、ひいおじいちゃんとおるいてさんぽをした。
- ・ 小さい川が道路の横にたくさんあって、それを見ていたり、清水小学校の横の歩道橋を渡ったことが一番古い思い出です。
- ・ 小さい頃道にタライを置いて水を入れ、行水や水遊びをしました。

【人と空間の相互作用】

そういった観点で、記憶という点から人と空間との関係を改めて考えますと、このような構造になっているのかと思っています（スライド20）。空間、あるいは土地、場所というものと、その上で生活をする人が日々かかわり合いをしていて、その中で記憶とか、その上で経験したことを物語として人々が生み出していくわけです。実は空間がないとどんどん消えてしまう側面もある。人間というのは、意図的なのかどうかはわかりませんが、空間とのかかわり合いによって生まれた記憶とか物語というものを空間にアンカリングする、記憶を空間に固定化するというような側面がまずあるのではないかと思います。

20

人と空間の相互作用



一方、空間に固定化する、例えば松山城で経験をした記憶を松山城に付与する、固定化した上で、日々松山城を見るたびに、松山城というものがリマインダーみたいな形で記憶を刺激する、活性化していく。そういう側面があって、アンカリングとリマインダーという循環がドライブすることによって記憶も蓄積されていきますし、もっと言うと地域アイデンティティというものが形成されていくのではないかと思います。

記憶の役割、記憶と場所と人との関係というのは、若干話が飛びますが、それを裏づけるような話は結構あります。その一つとして、これは、文化人類学の知見ですけど、アメリカのインディアン、アパッチ族を調べた話ですが、アパッチにとっては場所の名前がかなり重要な、象徴的な意味があると言われている（スライド21）。原住民の方は、例えば小川の地名でもすごい意味があって、horse fell down into waterという地名をその場所につけているのです。これはどういうことかという、昔、その場所で若い女性が馬に乗って小川に落ちて命を落としたというような経験があり、その経験をアンカリングする、忘れないように、その場所の地名として残しましょう、そうやって空間に記憶を植えつけていく。そのため、地名に特別な意味が、あるいは、その結果、場所に特別な意味ができてくるといふ事象もある。こういう事例が日本であるのかわかりませんが、多分同じような構造になっていると思います。

21

地名の象徴的意味 (Basso, 1984)



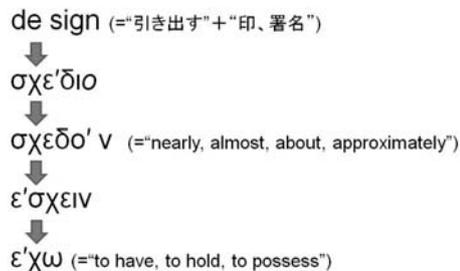
ii' íhítízh: ii' ("horse") + íhítízh ("it fell down into water").

アパッチ族の若い女性が馬に乗って小川に落ち、命を落とした場所を指す。

デザインという言葉は、要するに空間を形づくっていくというような意味があると思いますが、これも実は結論から言うと、記憶というのが非常に重要な条件になっています（スライド22）。そもそも、僕はデザインという言葉が嫌いだったのです。設計主義的なところがあって、ずっと嫌い嫌いと言っていたのですが、今、自分が属しているのも社会デザインコースというところでした、また愛媛大に新しい学部ができますけど、そこも環境デザイン学科で、その中の自分がかかわるのが地域デザインコースで、嫌い嫌いと言ってもおられないと思いました。そこで、一度語源を調べてみました。

22

“デザイン”の語源



“過去の所有を思い起こすこと”

デザインというのは、deとsignからもともとなっていて、deというのはderivation、引き出すという意味で、signというのは署名とか印ということで、意味としては実態を引き出していくということなのです。それで間違いはないですけど、ギリシャ語の起源をさかのぼっていくと、まず途中でnearlyとか、almostとか、aboutとか、approximatelyというような意味があります。これは不完全という意味です。完全なものであればデザインする必要はなくて、何かが足りない、欠乏しているという意味がもともとあったみたいです。それをもっともっとさかのぼっていくと、to haveとか、to hold、to possess

という失われたものをもう一度呼び起こしていくというような意味がある。

こういうことを考えると、何を引き出していくかということ、今失われつつあるような記憶とか、過去自分たちが持っていたもの、こういったものを思い起こしていくことがデザインのもともとの語源だというようなことにぶち当たりました、ここまでさかのぼるとデザインという言葉もいいなと、ようやく自己了解できました。

【死生観から見る道路空間】

空間と記憶という話を考えると死生観という話まで行き着かざるを得ないところがあって、日本だけには限りませんが、定住社会であれば、やっぱり空間にご先祖様というか、死者を投影するような感覚、そういう死生観があります。これは柳田國男の本ですけれど、「死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから自分たちの生業を見守ってくれている」、こういう死生観です（スライド²³）。要するに国土とか地域、空間と死者とが合わさって、場所や土地に非常に特別な意味合いが日本人にはあるということです。

また段畑の話に戻りますが、段畑に携わっている方々へのインタビューで、この場所と先祖を重ね合わせている方が非常に多いことがわかりました（スライド²⁴）。これは大分昔、昭和の初めぐらいはあたり一面段畑だったのが、荒廃してしまっただけですが、それをまた保存するために段畑を守ろう会というのがあります。保存する形に空間整備が進んでいった背景には、地域の方のお話には、先祖というのが非常によく出てきて、非常に貧しかった先祖が何とか段畑を通じて自分たちを育ててくれた、段畑を見ると、そういう先祖たちの思いをリバイブするということができる。その空間が大切な遺産なので、自分たちも後世に残したい、そういう言葉を皆さんおっしゃいます。

23

日本人の死生観

“この島々にのみ、死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念しているものと考え出したことは、いつの世の文化の所産であるかは知らず、限りもなくなつかしいことである。．．．我々の証明したいのは過去の事実、許多の歳月にわたって我々の祖先がしかく信じ、さらにまた次々に来る者に同じ信仰を持たせようとしていたということである。”

（柳田國男、『先祖の話』）

24

『段畑農業は．．．倍の労苦をしても半分もできない．．．ワシもそういう先祖の辛い目を知っとるきに、今の我々があるのもそういう先祖のお陰じゃきに。』

『ワシは理事会で遊子漁協も貝やハマチを犠牲にしてこうゆう豊かな暮らしができるようになったんじゃきに供養塔を建てんかゆうてワシは提案したんやきん。』

『やっぱり先祖が残した大切な遺産じゃきに、後世に遺してやりたいとゆう気持ちは、そりゃ一番やったな。』

かなり雑多な話になりましたが、そういう観点から道路空間づくりということを考えても、記憶を想起するような空間づくりというのと、記憶を喪失してしまうような空間づくりというものと2つあり得て、前者は、過去の記憶に配慮した道路空間づくりであって、空間を整備することが地域のアイデンティティというか、心を形づくっていくような、そういった対応関係ができていような空間づくりがあっただけかと思えます（スライド25）。

25

記憶想起の道路空間づくり／記憶喪失の道路空間づくり

- ・記憶想起の道路空間づくり
 - ・過去の記憶に配慮した道路空間づくり
 - ・道路空間づくり=住民の心の形づくり
- ・記憶喪失の道路空間づくり
 - ・過去の記憶に配慮しない道路空間づくり
 - ・道路空間づくり≠住民の心の形づくり

具体策はあまりないのですが、3つぐらいポイントを言いますと、1つは、アンカリングとリマインダーということで（スライド26）、人々の記憶に残っていくような空間づくりをしていく必要があるだろう。その場所を訪れると、過去のかかわった経験をリマインドできるような空間。松山のロープウエー街は今、風鈴なんかもあって、こういうのがあっても、記憶にアンカリングしやすいのではないかという気がします。また、俳句ポストが道端にあって、通るたびにアンカリング、あるいはリマインドしやすいのではないかという気がします。

26

記憶想起の道路空間づくり

- ・人々の記憶に残る道路空間づくり (anchoring)
- ・人々の記憶を想起させる道路空間づくり (reminder)



あとは、現在の町並みの底流に流れているような過去の町並み、あるいは記憶、こういったものを少なくとも配慮するというか、そういうことをわかった上で空間づくりをやったほうがいいのではないかなということです。これも僕の非常に好きな本ですけど、松山の『わすれかけの街』という本です。愛媛新聞社に勤めていらっしやった方が1年かけて、松山は戦争で全部焼け野原になったので、戦前の空間というのがあまり残っていない。その戦前の空間をインタビューからもう一度地図に起こすというような活動をされていて、こういう本を書かれています。（スライド27）

27

記憶想起の道路空間づくり

- ・現在の街並みの底流をなす過去の街並み・記憶への配慮

